

## 批判健康心理学の挑戦：第 7 回国際批判健康心理学大会

Current Trends of Critical Health Psychology: The 7th Conference of  
the International Society of Critical Health Psychology五十嵐 靖博<sup>1)</sup>

抄録

批判健康心理学は健康心理学の主要なアプローチのひとつとされ、社会的要因の影響や権力関係を分析する批判心理学の視点を重んじている。それは健康や医療と個々人の心や主観性に関わる問題に取り組み、健康心理学を推進している。批判健康心理学が依拠する価値観や認識論などの哲学的立場やその研究の実際を、国際批判健康心理学会の活動と同学会第 7 回大会から報告する。

キーワード：critical psychology, the International Society of Critical Health Psychology, social factors, governmentality

## I. はじめに

健康心理学は心理学の諸知見を健康や医療に関わる問題に適用することを目指す領域横断的な学問である。生理心理学などの生物学的アプローチから文化心理学、精神分析的な諸研究に至る多様な心理学の領域の中で健康心理学は近年もっとも発展した分野の一つとされる。現行の心理学が抱える社会的、政治的問題に正面から取り組む批判心理学が主要なアプローチのひとつとして認められている点で健康心理学は先進的であり、20 世紀末以降の心理学史の動向を考察する上でも注目される。

## II. 健康心理学の発展と 4 大アプローチ

健康心理学は身体の健康のあらゆる側面に関心の対象とし、健康の維持・増進、疾病の予防と治療、健康や疾病に影響を与える要因の究明、医療制度や健康政策の分析と改善等について数多くの知見を生み出してきた（本明,2000）。健康心理学は人が健康を維持するために何をしているか、どのようにして病気になるのか、病気になったときにどのように反応するかといっ

た健康と疾病に関する心的メカニズム、健康を維持・増進し疾病からの回復を促す心理学的介入を探究している。身体の病気やストレスへのコーピング、痛みのマネジメント、障害からの心理社会的リハビリテーション、健康なライフスタイルの促進、慢性疾患に苦しむ患者のためのサポートグループの運営など数多くの研究や介入を生み出してきた。

アメリカ心理学会では 1978 年に 38 番目の部会として健康心理学部会が設立され、今日では 5000 余名の会員をもつまで発展している。北米では健康心理学者が健康専門職者の一員として病院や地域保健センターなどの医療機関で医師や看護師とともに疾病の治療やリハビリテーション、予防のために活動しており、大学などの研究機関ではこれらを目的とする健康心理学的な介入に関する研究が活発に行われているという（Stam,2000）。

健康心理学の主要なアプローチとして、イギリスの健康心理学者 Marks は次の 4 つをあげている（Marks,2002a）。

1. 臨床健康心理学 clinical health psychology : 心理社会生物モデルを採用し、病院など医療界のヘルスケア・マーケットでサービスを提供している。臨床心理学と関係が深く、個々のクライアントを対象とする。

2. 公衆健康(衛生)心理学 public health psychology : おもに集団を対象として、健康に係わる問題を社会的影響などの公衆衛生の視点から説明する。疫学的研究や健康教育を含む。

3. コミュニティ健康心理学 community health psychology : 地域のコミュニティや学校や職場などで、健康の維持・増進や疾病の予防のために活動する。

4. 批判健康心理学 critical health psychology : 力(power)の格差(権力関係)や社会経済的地位 SES やマクロな社会的過程が、健康や医療、社会問題、健康心理学自体にもたらす影響を検討する。健康心理学の理論や実践をリフレクティブに分析する。

これらのアプローチは互いに補完し合う関係にあり、多くの健康心理学者は複数のアプローチを用いて研究実践を行っている。

また上記以外にも健康心理学を、基礎健康心理学(病気の発症と心理学的要因の関連、病気への対処、医師による処方へのアドヒアランスなどを研究する)、職場の健康心理学(職場の健康、ストレスと仕事、健康への環境の影響などを検討する)、臨床健康心理学(病院で治療を受けている人、病気に直面している人、種々の治療のあり方などを検討する)、コミュニティ健康心理学(健康と病気、健康の促進、公衆衛生に関わる社会的要因、コミュニティの要因などを研究する)、批判健康心理学(個人の水準やより広く文化の水準において権力や社会的格差などの構造的問題と健康の関係を検討する)などに分類する見方もある

(Massey University Health Psychology Programme, 2012)。ここでも批判心理学が健康心理学的実践のために大きな役割を果たしていることがうかがわれる。

### III. 批判心理学と批判健康心理学

もちろん身体の健康と医療の領域を主導してきたのは、身体の疾病を自然科学によって説明し治療する医療モデルである。自然科学の方法論にもとづいて疾病の原因を特定するために様々な研究が行われ、物質としての身体に対して外科的手術や投薬などの介入によって治療が行われている。そこではクライアントの心や主観性も中枢神経系の活動に付随する現象と見做されている場合が多い。

健康心理学は身体の健康の回復と維持、増進のために心的要因が担う役割の重要性を自覚することから出立した。しかし、認知行動主義にもとづく北米の実証主義的な主流心理学を背景として発展してきたため、研究や介入のために用いられる方法は自然科学をモデルとしている。生物医学モデルの限界を超え心理社会生物学的モデルにもとづいて健康の問題に取り組むと謳われているが、S-O-R 図式を前提とした心観のもとで外的な刺激によって個人の内部にある心的過程が駆動され、種々の心的処理を経て行動が起こる、という心の存在論が当然視されている。

認知行動主義は北米で 1930 年代に成立した新行動主義が第 2 次大戦後に認知行動主義へと発展し、アメリカ心理学が諸国の心理学を席卷した過程で世界のアカデミックな心理学の主流の座を占めるようになったものである。それは客観的で科学的なアプローチとして称揚される一方で、過度の個人主義(社会やコミュニティなど人が生活を送る文脈や家族や友人や同僚などの重要な他者から切り離され、個人の内部に独立して存在するものとして心捉える)、受動性(外的刺激によって生起する受け身の反応として心や行動を理解する)、知性への偏重(認知などの知的な過程が過度に重んじられ、感情など他の過程はそれに付随するものと見なされすい)などの特徴をもち、そこに西洋の、特に北米社会の文化や男性中心主義的な価値観が反映していることがかねて指摘されている(たとえば Fox & Prilleltensky, 1997)。認知行動主義が措定する S-

O-R 的な心のメカニズムが人間一般の心を代表しているなら、これらとは異なる心の理論は劣ったもの、あるいは異常なものともみなされ病理化されるおそれもある。

心理学史の立場からみた第 2 次大戦後の心理学の特徴として、理論や方法の発展と心理学知識の飛躍的増加、研究領域の拡張、心理療法の大衆化などとともに、心理学が多様化し種々の非主流心理学が発展したことがあげられる (Pickren & Rutherford, 2010; 五十嵐, 2011)。心理学界で主流の座にある男性の心理学に対して女性の視点を重んじる研究者が現れ、特にフェミニスト心理学は認知行動主義にひそむ男性中心主義的偏見を批判し抜本的に新しいアプローチを提唱している (たとえば Unger, 2001)。また主流を占める白人の心理学に対して、非白人の立場からブラック・サイコロジーやヒスパニック・サイコロジーが提唱されている。また性的少数派の視点から LGBT 心理学が提唱され、西洋とは異なるアジアやアフリカなどの文化の視点から様々な土着心理学 (indigenous psychology) が生まれた。

こうした様々な非主流心理学の中から、20 世紀末以降に各国で批判心理学と総称される新しい動勢が注目されるようになった (Parker, 1999)。批判心理学は英語では *critical psychologies* と複数形で表記すべきだと言われるほど主題も方法も理論的リソースも多様である。だが、主流心理学の理論や研究や心理臨床や教育などの諸実践、学会などの制度、社会との関係などに関わる問題を自覚しそのために不利益を被っている弱者の立場を擁護して、現行の心理学の哲学や方法論、実践のあり方などを検討し新しい心理学をめざす姿勢を、国境を超えて多くの批判心理学者が共有している。

他の諸領域と比べて、健康心理学では批判心理学的アプローチが盛んである (Marks, 1996)。臨床心理学に比べていまだ発展の途上にある若い領域であること、社会経済的地位や権力の格差などがその主題である健

康に影響することが明らかなこと、批判心理学が盛んなイギリスやカナダ、ニュージーランドなどの研究者がこのアプローチに拠って批判健康心理学を主導してきたことなどがその背景であろう (五十嵐, 2006)。

このように批判健康心理学は個人の心的過程だけでなく、個人が生活を送る社会を分析の対象としている。健康専門職者の活動自体が検討の対象になり、医療や行政や産業や学校教育など健康専門職者が働く社会セクターの価値観やその暗黙の前提、実践のあり方を検討する。批判健康心理学が依拠する価値観は、既存の枠組みにとらわれない思考の自由や他者への思いやりであるという (Murray & Chambalen, 2007)。文脈や個々の人だけでなく、社会の制度的構造や経済、行政、商業主義などを検討して、<sup>パワー</sup>権力や統治のためのツールとして知識が作動する様態を解明しようとしている。研究のために用いる方法は特定のものに限定せず、質的方法を含め様々な方法論の長所をいかして批判的分析を行っている。

批判健康心理学は特に健康と<sup>パワー</sup>権力の関係に注目している。医療の現場では患者と医師など医療者の間に明らかな権力の格差があり、これが患者の健康と福祉の実現にとって障害となることも稀ではない。また個人の心を超えて商業主義などの経済的要因や、政治や行政、文化的伝統などの幅広い要因が健康に与える影響を検討している。ここにも権力の格差が反映している。収入や職位など社会経済的地位が健康に関わる種々のリソースへのアクセス可能性と関連しており、どのような健康政策をどのような方法によって実施するか、あるいは行わないかが各社会階層に属する人の健康に影響を与える。喫煙や過度の飲酒、ダイエットの流行などが、たばこやアルコール飲料を販売し利益を求め企業や、それらの企業の広告を請け負うマスメディアの活動と相関していることは明らかである。批判健康心理学に関心をおもちの方には *Health psychology: Theory, research and practice* (Marks, Murray, Evans,

& Estrada, 2010) をお薦めしたい。同書は批判健康心理学の価値観や問題意識を踏まえて執筆された健康心理学のテキストである。また批判心理学的取組みの実際を知るには *Critical health psychology* (Murray, 2004) や *Qualitative health psychology* (Murray & Chamberlain, 1999), *The Health psychology reader* (Marks, 2002b) が好適である。

#### IV. 国際批判健康心理学会 (ISCHP)

上記のように主要なアプローチのひとつにあげられるほど、健康心理学では批判心理学が重要な役割を演じている。アメリカ心理学会健康心理学部会などの認知行動主義が主流を占める学術団体とは別に、批判健康心理学に取り組む研究者によって国際学会も設立されている。1999年に健康心理学への批判的アプローチと質的アプローチに関する国際会議がセントジョーンズ大学（ニューファンドランド島、カナダ）で開かれ、諸国の研究者の連携が進んだ。2年後にバーミンガム（イギリス）で開催された同会議で、国際的な学術団体を設立する決議がなされ国際批判健康心理学会 (International Society of Critical Health Psychology; ISCHP) が発足した。以来、ISCHPは隔年で大会を開催してきた。2003年のオークランド大会（ニュージーランド）、2005年のシェフィールド大会（イギリス）、2007年のボストン大会（アメリカ）、2009年のジュネーブ大会（スイス）をへて第7回大会がアデレードにて開催された。

発足以来、ISCHPは下記のようなスタンスで健康に関する様々な問題に取り組んできた (ISCHP, 2005; 五十嵐 2006)。

- ・主流健康心理学が社会的政治的問題を取り上げないことを批判し、それが依拠する実証主義的方法論の諸前提を検討する。
- ・社会構成主義やポストモダニズム、フェミニズム、マルクス主義などのメタ理論に関心をもち、ディスコ

ース分析やグラウンデッド・セオリー、アクションリサーチ、エスノグラフィーなどの質的研究方法の意義を認め、積極的に活用する。

- ・社会的、政治的問題が健康に及ぼす影響の大きさを自覚し、クライアントを実際の生活の文脈の中で理解するために質的研究法を推奨する。
- ・特に困難な立場にある弱者の健康を重んじる。社会的、政治的、文化的要因（貧困や人種差別、性差別、政治的抑圧など）が、健康と病気を規定する一因である。

これらを踏まえて今日 ISCHP は、

- ・研究主題の選択と研究方法の選択において平等と透明性とインクルージョンをめざし、様々な社会的事象の分析において社会正義を促進する、
  - ・相互の尊重と協働を重んじ、国際的、多文化的に活動する、
  - ・上下関係や派閥、縁故などにとらわれない、
  - ・多様な立場にある参加者を迎えるため努力する、
- という方針にもとづき活動している (Staiton-Rogers, 2011)。こうした ISCHP の運営指針は第7回大会でもいかに発揮されていた。

#### V. 第7回国際批判健康心理学会大会

第7回 ISCHP 大会は 2011年4月18日から20日までアデレード大学（オーストラリア）にて開催された。第3回オークランド大会に続いてオセアニアでの開催となったが、オーストラリアとニュージーランドはイギリスとともに批判心理学が盛んである。イギリスなどから移住した白人がこれらの地を植民地化した過程で、長い歴史をもつアボリジニの生活文化を破壊し疎外してきた負の歴史がその背景となっている。価値中立的で普遍的に適用可能な科学知識とされている心理学理論やそれにもとづく臨床実践が、西洋とは

異なる文化に属しそれによって迫害されてきた人々にとってどのような意味をもつか、今大会でも主要なテーマのひとつとなっていた。こうした意欲的なプログラムを実現するために尽力された大会組織委員長の Shona Crabb 先生（アデレード大学）はじめ、スタッフを務められた皆さんに心からお礼を申し述べたい。開放的で温かく、かつ健康と心と社会が関わる本質的な問題を正面から批判的に討議するこの大会に心理学者をはじめ医学研究者や看護研究者、社会福祉学、社会学など健康に関する様々な批判的視座をもつ多くの研究者が参った。先住民であるアボリジニを代表して Uncle Lewis 氏が歓迎のあいさつを述べられ、その後 ISCHP 会長を務められる Wendy Stainton-Rogers 教授（オープン・ユニバーシティ）の開会の辞によって、公式プログラムが始まった。

第 7 回大会は Time, Place, Face, Governmentality, Methods & Methodology をキーワードとして、次の 5 つのテーマに則して開催された (<http://www.adelaide.edu.au/ischp/>)。

1. 時間：子どもと家族の健康など、ライフイベントとライフステージに応じた健康と医療。
2. 場所：各国の、各地域の異なった政治的、経済的、社会的情勢に応じた健康と医療。特に植民地化による先住民の健康への影響と移民の健康の問題。
3. 人の尊厳 (face)：ジェンダーやセクシュアリティ、身体性 (embodiment) などを含む主観性や自我同一性とのかかわりからみた健康と医療。
4. 統治性：社会統制の施策との係わりからみた健康と医療。
5. 研究方法論：健康と医療を批判的に検討するため、既存の方法に代わる革新的な方法を探究する。

今大会で掲げられたこれらのテーマに健康が社会や政治や経済と密接に関わるものであり、身体の健康をめぐる施策が社会統制や統治のためのツールの一つであ

ること、そうした文脈の中で生活する人の心や主観性に健康と身体に係わる問題が大きな影響を与えていること、特に被植民者や移民などの社会的弱者の立場を考慮すべきことなど、批判心理学の考え方や価値観が表れている。

第 7 回大会における研究発表は *Masculinitis (2005)* などの著書で国際的に有名な社会学者 Raewyn Connell (シドニー大学) 教授の基調講演 ‘*Constructing women's 'problems'*’ や ‘*Governmentalism through the production of deficit identities*’、‘*Being healthy in an unhealthy environment*’ などのシンポジウムに加え、口頭発表やポスター発表で多くの有意義な研究が報告された。これに加え、参加者が互いに自由に意見を述べ合う Pecha kucha session、次回大会が開催される 2 年後 (2013 年) のありうべき批判健康心理学の姿を 5 分間で論じる 5 minute challenge presentations など、新しい討論の方法も試みられていた。知的刺激に満ちたプログラムの内容は各セッションのタイトルからもうかがわれる (表 1)。公式プログラムが始まる前日には、研究方法を学ぶワークショップも開催された。心理学におけるディスコース分析の創始者のひとりとして有名な Jonathan Potter 教授 (ラフブラ大学) もワークショップの講師を務められ、参加者はこの方法論について直に学ぶ機会を得た。大会会期中には公式夕食会の他に Potter 教授らの著名研究者と食事をともにしながら気軽に交流する機会も設けられた。これらをとおして今後の研究の糧を得た人も多かったに違いない。

次回の ISCHP 大会は 2013 年 7 月 21 日から 24 日までイギリス、西ヨークシャー州のブラッドフォード大学で開催される。健康心理学や批判心理学に関心をもつ多くの日本の研究者の参加を期待したい。

表 1 第 7 回国際批判健康心理学大会の発表セッションとワークショップのタイトル

*Psychological Dimensions of Social Transformation*  
(Raewyn Connell 教授による基調講演)

*Critical Perspectives on Young People's Drinking Cultures*

*Constructing Women's 'Problems'* (シンポジウム)

*Media and Health*

*Time, Spaces and Places*

*Teenage Mothers and Abortion* (シンポジウム)

*Experiences of Illness and Treatment*

*Representing Sexuality*

*Working with Indigenous Communities*

*Governmentalism through the Production of Deficit Identities* (シンポジウム)

*Critical Approaches to HIV Research*

*Aboriginal, Maori & Torres Strait Islander Health*

*'Good' Mothers and 'Yummy' Mummies*

*Health Care in Context* (シンポジウム)

*Embodiment and Health*

*Health and Ageing*

*Childhood Discourses of Risk and Disorder*

*Critical Issues in Treatment of Illness and Disability*

*Maori and Pasifika Identities and Knowledges*

*Critical Theory and Methods in Health Research I*

*Mental Health and Racism : There could be cathedrals of the spirit as well as stone* (Pat Dudgeon 教授による基調講演)

*Putting Critical Social Science to Work : Possibilities, Challenges and Compromises*  
(Rosemary Du Plessis 教授による基調講演)

*Pecha kucha session*

*Being Healthy in an Unhealthy Environment* (シンポジウム)

*Critical Perspectives on Reproductive Health*

*Death and Dying*

*Health in Culturally and Linguistically Diverse Communities*

*Constructions of Mental Health*

*Health and Motherhood*

*Critical Theory and Methods in Health Research II*

*Indigeneity and Governmentality*

*Governing Mental Health*

*5 minute challenge presentations: "Where I'd like to see critical health psychology in 2 years from now"*

ワークショップのタイトルと講師

*Working Constructively with Indigenous Communities :Experiences from Australia and New Zealand* (Neil Drew , Darrin Hodgetts, Mohi Rua, Shiloh Groot)

*Analysing Health Related Interaction* (Alexa Hepburn, Jonathan Potter)

*Courageous Conversations: Beyond Cross-cultural Training* (Pat Dudgeon, Malcolm Fialho, Yvonne Clark)

*Participatory Action Research :Social Research for Social Change* (Barbara Schneider)

文献

Chamberlain,K.,&Murray,M. 2007 Health psychology. In C.Willig & W.Stainton-Rogerspp(Eds),The SAGE handbook of qualitative research in psychology.Pp390-406.

Connell,R.W. 1995 Masculinities. Berkeley: University of California Press.

Fox,D., & Prilleltensky,I.(Eds.) 1997 Critical psychology: An introduction. London: Sage.

五十嵐靖博 2006 批判健康心理学の可能性：第 4 回国際批判健康心理学会議 山野研究紀要, 14, 63-73.

五十嵐靖博 2011 批判心理学とは何か：現代批判心理学運動と日本における可能性. 心理科学, 32 (2), 1-14.

The International Society for Critical Health Psychology 学会紹介ウェブサイト (<http://www.med.mun.ca/ischp/> . 2005 年 10 月 31 日に取得.)

Marks,D.F. 1996 Health psychology in context. Journal of Health Psychology,1,7-22.

Marks,D.F. 2002a Freedom, power, and responsibility : Contrasting approaches to health psychology. Journal of Health Psychology,7,5-19.

Marks,D. (Ed.) 2002b The Health psychology reader. London: Sage.

Marks,D.F.,Murray,M.,Evans,B.,& Estacio,E.V. 2010 Health psychology: Theory, research and practice. London: Sage.

Massey University Health Psychology Programme 2012 What is health psychology?

(<http://www.massey.ac.nz/massey/learning/departments/school-of-psychology/postgraduate-study/programmes-of-study/health-psychology/programme.cfm> .2012 年 2 月 1 日に取得. )

Murray,M. (Ed.) 2004 Critical health psychology. New York: Palgrave Macmillan.

Murray,M. & Chamberlain,K. (Eds.) 1999 Qualitative health psychology: Theories and methods. London: Sage.

Parker,I. 1999 Critical psychology: Critical links. Annual review of critical psychology,1,3-18.

Pickren, W. & Rutherford,A. 2010 A history of modern psychology in context. New York : Wiley.

Unger,R.K.(Ed) 2001 Handbook of the psychology

of women and gender. New York : Wiley. (R.K.アンガー編 森永康子・青野篤子・福富譲監訳 日本心理学会ジェンダー研究会訳 女性とジェンダーの心理学ハンドブック 北大路書房 2004)

Stainton-Rogers,W. 2011 Plenary. ISCHP 2011 Abstracts book,2-3.